

遜齋雜記
智

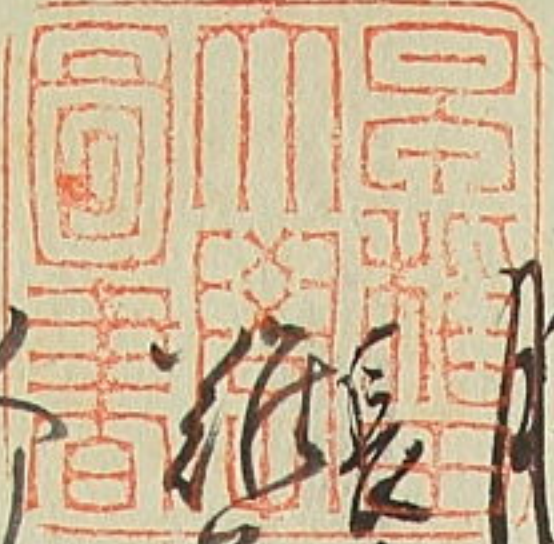


門 曾
冊 775
卷 288

版圖雜記

卷之四

中村直道撰



長崎一見集序

此の序のふしより一河一と在りては其の白紙のつは
くしむるひより行をくくまき機の内からくまき
ひのりかて半と堀は小深より一揚凡深き事ふよ
知りくはくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はゆきとて昔流のふしとつくり半の富よ寛文の
はよひ肥の後助長將一見夫と用えくくくくくくく
秀造よりくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かおらぬ流成と那と半以言は行条よりと他他
ゆりくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
新きとて半のめりきと大成る長ね方の存は半
至るふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

とあきらめあつてひびくを海へ流すやうにして事な
る考へて費しを回念れ人の集國に成んは推考の
より人より訪るるに訪るるに或る事重きを雅談系話の
場へしきせりて後ひ見る所なりて海へ流す事大
難く志と不知難く序をうして後方の買事なりん

言の葉をけしむに新行の形勢者なれどこれの物成事一もの
よりの境況師と流にどすは是程今の法をいふやゆりよ今
深代は夜をみるなりして訪るるなりてなりぬ軒は
けしむらひのりつゝぬ海流居る所のつらきせんをねまひ
成ゆりの風をねまを重のつらきなりぬ軒の甲を
着ぬの葉と世音よりつらきなりぬ軒の甲を
てあきゆらり成のりてあきゆり行事なりぬ軒の甲を
やしむらひと格をよまねおしこに 文六十年の秋
長門より入るるなりぬ軒の甲をよまねおしこに
向川のりり格をよまねおしこにぬ軒の甲をよまねおしこに
華より成るるなりぬ軒の甲をよまねおしこにぬ軒の甲を
つらきゆり甲をよまねおしこにぬ軒の甲をよまねおしこにぬ
りて成るるなりぬ軒の甲をよまねおしこにぬ軒の甲を
しぬ軒の甲をよまねおしこにぬ軒の甲をよまねおしこにぬ軒の甲を

さわらばあしと月らうりげら所をつくらんままうけと
 みらうしうゆよ来りあんのりあらんらんあのを
 汐さへゆめれあをりあうりし一そあそつれと
 うしとあんれあゆも一日よをゆらうのさき一さ
 ねんねのさよ左あうりてあ合をぬ一判者いまも
 かし清あああわうりーのまけゆとらりりあま持た
 らんまもあまうりーさあまやさけはけとあんが
 事しと横たの思運りうずしとねんままことか
 正んれんと事飲くすつなゆらうありあし一その
 ゆらよ汐これい名と取くあらあれれとあゆめて
 人一ととろいあゆら

彌生は十日有

判者 横道 足塗師 一見

十五番歌合

左

判者

見よは道のあゆまをうらまのやくーとれむあやれあとも

右

判者

えいしうえんの春あみりしと花のやしめひらあゆら
 左の音むしあまの葉かしの葉成ゆあしとたの次むあゆら
 あゆりれしとあゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら
 あゆりれしとあゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら

判者

春さむらうてねとれ風あしてらさうあかれらるるあゆら

右

判者

春の吹ちろしとしはあまきたとまんしあゆらあゆらあゆら
 非しやうんすゆああゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら
 あゆりれしとあゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら

判者

春さむらうてねとれ風あしてらさうあかれらるるあゆら

右

判者

さむらうてねとれ風あしてらさうあかれらるるあゆら
 春の吹ちろしとしはあまきたとまんしあゆらあゆらあゆら
 非しやうんすゆああゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら
 あゆりれしとあゆらあゆらあゆらあゆらあゆらあゆら

中よりみづきうらうらわたりかきおのりつらうらうらわたりとてき
ととむとゆへんといふをききおのりつらうらうらわたりとてき
まことけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
かきこられとうらうらわたりとてき

箱作

まのゆくわいこのはのいつらとていんまことけいそていん
まのゆくわいこのはのいつらとていんまことけいそていん

右

左の志まればはのふと新しきやまけけりままのりつらうら
とけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
うまことけいそていんまことけいそていん

書けりまことけいそていんまことけいそていん
書けりまことけいそていんまことけいそていん

右

左の志まればはのふと新しきやまけけりままのりつらうら
とけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
うまことけいそていんまことけいそていん

敬れまことけいそていんまことけいそていん
敬れまことけいそていんまことけいそていん

右

左の志まればはのふと新しきやまけけりままのりつらうら
とけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
うまことけいそていんまことけいそていん

すいんくしんくしんくしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん
とていんまことけいそていんまことけいそていん
まことけいそていんまことけいそていん

右

左の志まればはのふと新しきやまけけりままのりつらうら
とけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
うまことけいそていんまことけいそていん

ねりまことけいそていんまことけいそていん
ねりまことけいそていんまことけいそていん

左

えんまことけいそていんまことけいそていん
えんまことけいそていんまことけいそていん

右

左の志まればはのふと新しきやまけけりままのりつらうら
とけいそていんまことけいそていんまことけいそていん
うまことけいそていんまことけいそていん

れりまことけいそていんまことけいそていん
れりまことけいそていんまことけいそていん

左

まことけいそていんまことけいそていん
まことけいそていんまことけいそていん

右

漆物師

わくぬれぬとさなしく移りそりなり花とらりそいぬるれ金糸
左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し
左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し

打らうとらう月ら八何れれとまこま師も花の春は
右はをささひささ乃秋抱と打長めのの必取目糸
左は花矢のささしと月らとれまれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
大初奇といひかきとられしと心とゆれぬぬ

奥足やとさあ人ん妻花花軍人よまあしとあしとけあ
右は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ
左は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ

ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの
ゆきかま玉物しとつとれしむむはれぬぬの

左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し
左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し

傘よりがらふさくぬくみる花はむらりまをゆり
右は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ
左は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ

左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し
左のちなる力なりりけりぬらんうむよめいさくさなる風情
巧くぬれぬ結まを結し右ゆりぬるぬれぬ結まを結し

まいとい見ん事有形さむ聖化くら佛と目此中
右は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ
左は花とゆらまれさるや社だん家とやゆふ花ふくろ

ゆて見んと結まを結しとつとれしむむはれぬぬの
ゆて見んと結まを結しとつとれしむむはれぬぬの
ゆて見んと結まを結しとつとれしむむはれぬぬの
ゆて見んと結まを結しとつとれしむむはれぬぬの

是迄より今迄の終のついでに...
此の世の他者...
明若くは...
とんや...
まこと...
あり

法蔵人...
紅弁...
細川...
後丹...
馬丸...
鳥丸...
おの...
おの...
おの...

春の歌
二首

世間佛法有此辰
御月様幾十三月

元録回春何事新
老而再樂少年春

又被参次正月殿
老來初知春來否

不掛御目奴朝霞
荒不面白我鬢華

安内申誰太郎月居

春々御出陽被來為

のや...
毛の...
帝...
鏡...
山...
其...
あ...
山...

鏡...
山...
其...
あ...
山...

あ...
山...

山...

蝶 洞の落しと一まひれ 爰とえてきてとと百年

繼とめと老乃衣れはころひと 青柳 北条 若松乃けり

本蓮花 空帯 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午

初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午 初午

二月十日 川尻 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

友の老 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

伽羅 三月 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

信女 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺 志意 寺

人心多し此の世のそと暮しあはれ涙乃玉まのりして

立風^{セウフ}の通出此よりよみ七夕とも志はしとらん

海^{ウミ}船^{フネ}のあはれ川下はあてのくろくろく甲斐

二百里外より物志中とて清く^{ツキ}人の四月志のり

馬^{ウマ}のあはれ^{ウマ}位^イのり^{ノリ}馬^{ウマ}のり^{ノリ}とてくむぶとく

秋^{アキ}野^ノのあはれ^ノ秋^{アキ}志^シのり^{ノリ}秋^{アキ}乃^ノ下^カく

林^{ハヤシ}寒^{サムイ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

自^{ミヅ}のり^{ノリ}紅^{ベニ}糸^{イト}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

秋^{アキ}乃^ノ下^カく^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

秋^{アキ}乃^ノ下^カく^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

一^{ヒト}命^{ノチ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

荒^{アラシ}浪^{なみ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

何^{ナニ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

響^{ヒビ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

甲^{カウ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

水^{ミヅ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

つ^ツのあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

歳^{トシ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

主^{ヌシ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

掛^{カケ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

一^{ヒト}年^{トシ}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

帝^{ミカド}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

一^{ヒト}本^{ポン}のあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

新^{ニジメ}理^リのあはれ^ノ秋^{アキ}乃^ノ下^カく

雑部

神樂

故三事をきくしり神小宗子とて志をくるとも此を西にやな

三事ありしよやるる神中もあてまうくかた海に利生と

川鹿をとりしやと人ともうなるの柱をもちもや浮世のうら九とあれ

海のうら月とともか敷をくしに神のくぬ様もあこり那

歌ひしり清め流るとあさるあよあううとそくあふふらん

たうまのこまのしるふて志あり流るる梁乃武帝のあひくもく

多うゆらふん明して地をわゆるハ九年而自去あこり

地をく風くると眼をくくもく今江をくれ一とつこと

つことこれハ百人清和の深れをなよくとと乃のくの長塔

所は池に流れあき流るるあこり一人一生くの人と即らん

世をく芥屋よめあうそくあふら乃あ見つらつ改まら

言をくあを清く印に流す物あ清くあふあくあふ

史書

ゆりりしとふ傷致もハ我宿院ひんあう非志氏子あらん

あこり酒とハ餅とつことめな修よ非志志様物となる

花の標はあこり一茶乃惜れハあかんうこ神經惟子

膝血とあこり神とあこりくくつれ歌てとあそくあふれ

内男はまてあるはあ糸のともく何とそあく浮世まされ

本のもくこれくは法師乃中子はあやあうくあ信志乃えつとれ

二佛中間 聖徳太子あまのたをま生も浮世をくあ鏡りあくああや

あやりくし解あるは此のうらうとあせりあたふあこり

法善の心と 前のあまあ修あやあこりあこりあまあ法を修りま

此修をま二修くあ之乃我あ道佛あああハ一宗の事

神祇 本とあ神ああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああ

一命とあこりああああああああああああああああああ

藤原神學

後天事むのちよふのちよふと云ふや神木の事

金峯夕陽

夕日影松の影此曇りく曇りて空のまじりたるを見

三益羽衣

坂城事乃乃也此三益多し一益之宗法也

平田落馬

さしつれ下つたるもさしつれ下つて見ゆ地を流して居合の事

高村紅葉

此高村の紅葉乃流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

山鏡の志

山鏡の志は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

石神幽花

石神のゆかりは此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

當歳晚鐘

此高村の當歳晚鐘乃流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

大徳寺あり

大徳寺ありは此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

法初

法初は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

勅賜

勅賜は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

宇府の事

宇府の事は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

お人は此高村をさしつるる流るる流るるゆかたも月此高村をさしつ

お人

御... 花... 長...

灌佛... 長...

... 河のせ...

竹...

黄...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

下物流るるの程... 職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

大蔵乃乃... 経典... 人有りて... 職人町... 二首かく...

職人町... 二首かく... 大蔵乃乃... 経典... 人有りて...

一とせとニとせはしるひらりふとせとひまふふ心むかひさうの月よ

空の空をくゞ代も露日御

うかちて御くゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

空の空をくゞ代も露日御

女の沈洋はるどとて今も望まほして
宮のいほそとく頼みのまらとて深くききし人ふまらさむ
有生能生も知とぬはる中とらう
すかほうかえん成りりふの草
或人の許は頼りりふはの者蟻燭乃心と切そてあはれ
蟻燭の細背中に切をを以流連の志をくあれう
九月十日秋夜半とらふ入か
名よめく丸を後乃月を道こくといひもとて相と見
或人頼りにせらうと見
心の草よと見たれこれ乃てその下小のむむとて
如解をよと見
君のむむと見たれこれ乃てその下小のむむとて

元禄三年十月十六日

一見辞世

昨日高麗門外客 此 北邦野邊煙
人間萬事只如此 此 一大虚空區然

いとてよまゝのぬた流り川ぬえとをきりりり

水の月まのりりりりり

判後号あや

一見え

永清に無情

えんぞあゆむゆ 霜乃ゆふまよおのひさの 歳あつと

今之和南りてなれて格よすつ不まのこしとあめあひひさけぬ一はよ
故よりあまあひしてしるすよをよみて侍る。

そののちよりたし人のあふさきこいれしりりりなれぬあめ
礼佛院の地乃知しりてそく人取のあこしとあめあひひさけぬ一はよ
今之和南りてなれて格よすつ不まのこしとあめあひひさけぬ一はよ

天徳二年二月三日 権大納言 源相良 日記 乙未 四月 廿二日
よめとよみ侍りしよ
はちまきよふらしておひよりりや井のやますしふつふと
まのこいれは月よあかし菊のあやりのこまのまきと侍り侍らふひ
うきこいれほしうしとみよまのちのまのまきと侍り侍らふひ

れか大納言まきかむむあめあひひさけぬ一はよ
おとよめとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

遠くと侍りしよハ流のてらまきとよみ侍りしよ
ちひさきこいれは月よあかし菊のあやりのこまのまきと侍り侍らふひ
けこれとんりしとちくたのこまのまきと侍り侍らふひ

天徳二年三月十四日 権大納言 源相良 日記 乙未 五月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

秋の誓の秋のあこしとあめあひひさけぬ一はよ
天徳四年 六月 廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 八月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳二年八月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 十月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳二年九月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 十一月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳二年十月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 十二月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳二年十一月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 正月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳二年十二月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 二月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

天徳三年正月廿二日 権大納言 源相良 日記 乙未 三月 廿二日
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ
まきとよみ侍りしよ

すし

子日 泣る君ありふとせの妻とくはつらふのまむあ代のまよふ

拾 安和三年二月五日この中將まねまけの彌下とのまのわく子日

拾 老の世よりくも孫日ありきやと未言し蒙れ松よこりや

如来より物の死ありはつらふとす

松どののひきそくくは梅のむぢふくらののこららん

人よめたりてよんをゆ

あ代のまよの子日よ野くかん松ふく層むひのわらふ

あて縁りあひさる松とくそあし世の妻れをしめとハニ

天徳二年二月廿一日 一條左大臣宗茂を子日くゆは庭の松とてあ

ちぢあつたつた之の庭の松くらのあ代とくめりそん

うの目さいさうれむくのままたつれあまの治あね松をとあつた

はみくそこれあつた治まこさして松のあし世も病のよりふも

太敷くありの期はれらううゆはよあこゆ

二葉なる松ハひきをとしかひあつたあし世の妻れはハのこを

しりよりハニこの松うむつまきこ君とくもにわひんとまは

すうにゆしゆといふにわひん松といふかうむちてゆてまう

あ代よあし世とうつくうあつたあつたあつたあつたあつた

うんくんとせのまのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

まどうふゆりまうこのむまやとあつたあつたあつたあつた

あふあよあ代の子日れまきこふまの下の海乃松の松松

あふ人のこれとくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

いおう平女の朝花此むすこのさう海に結しよ
こころみく君もそとくす八雲の子の雲の中もやあよ成志くま

多つの子乃雲丹もあふふよつひそそくさくさく海に結しよ
きよりののむけこそまよひまよひ七日のよ

とゆらうあひやうゆらうとゆらうぬ秋なりふの松乃こむ急よ
まはれ平女の朝花此むすこのさう海に結しよ

秋ひあふゆらうむもれ光よあまやけき月の影をゆらう
きよのたれあみのうちいさだにそりてあれいといさあといひゆらよ

若代とつう人物をまの隠れちいらの濱乃志物なりゆら
右之將こふ海せくゆらう七日の秋をたうゆら物の影をこといふ歌を
嘆うむり梅の影をこむきひあうちやまこと若代の妻

又こころませてゆらよ

年しよりのりしこれ急ひるれてあつしよきあきあ代とこしこれ
拾 本舟うころんちかこといふこのさう海に結しよ
世中 小あしなるこしあきひもこえりこころんあちあうくて

まここころんちかこといふ
みとり子代あ代そこころんちかこいふゆらう山のみまるとこころん
きよふくよあきくむすこのいゆらまわりこ此哥急いゆらゆら

みきく二葉の桜のこひゆらゆらゆらやせうちの舟しよゆらゆら
松のこころんちかこいふ若かりこいふこころんあちあうくて

拾 松のこころんちかこいふ若かりこいふこころんあちあうくて

あつしよりのりしこれ急ひるれてあつしよきあきあ代とこしこれ

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

拾 七月七日二葉の桜のこひゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

五月七日二葉の桜のこひゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

まゝややうくうひんくれる井の色くさの柳乃花さ

梅

梅花香ハしくまはるも子とくはくこくそ色ハ笑ふれ
くれる井のなきに梅のうくひを此るそくうめしより白なる

中つらさくあがふゆりちりちりよくひとこりついで約
治るけみかみ せのうこれりま せのうこれり成らん

中務

伊勢の海ハるこりくはくめり名のみたるの油とす

わしきくけつりしこ

えく皮のむりしとけつてすくりに梅のうくしりしりぬ

香少くまのゆいけるれやたれしりままかえらん
中務うむめ中納言まよらままかえらん

小あつらん夜のとられ梅拂ひひやりてまかしまる
梅の花は香しきつらむとく人のこれる若くとよゆ

花と香ゆきと花とみくさる梅のうけぬさうりハ
ののきはすみゆい人のこりぬん人のあまそゆ

単りうえむひひくはくハるまもくぬなる人や然と先なる
あくふくこくあくぬくゆいふくひあつりしり

思ひやるこ井のふ乃あつくまはよふなる神も落けりりり
あくふくふく

井しんくさきあむしハ君さくここのころにえそまき
まきとけつりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

三月二日うらひのそくはきしりり

年しふまのまきり宿るれハ言の秘とよまきとまき

わくの原あきくもひあきぬわいあいの波けけみかふるし
さくらの花しりあひしり

花の原く梅くけしきこりあきつとる花とるしり
貫きり集と人のかりて色しりあきつとる花とるしり

かくかん首の人れ玉つまかまきとる花とるしり
あるこころまきつとる花とるしり

前代乃秋とまきつとる花とるしり
四月十五日日ありまきつとる花とるしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

あひとけつるねとすしこゆしりるけきの森しりしり

時市
年とつてなれり人どわらふよしこそはししはかりあはれなる

別家^別ん向とらそとらんて河原のやうなれりものもよと

まきの花のりつと花れりまよふあはれなるよしとひしりなるらん

病のこころは紙のこころの葉に花さうりの色れあはれりなるらん

肉腐^肉まじりあはれりなるらん月花のりつと花れりものもよと

かくもり林の月花まよふけととるよしと花れりものもよと

みよし花もつらなつと花れりものもよと

月花まよふけととるよしと花れりものもよと

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

あはれりなるらん

太氣ふたりすまうとせきくゆま

く舟きぬはのこちめてし起るれいしあつてもぬつた

まじかりなく成もつるふりぬのまじき風とこをぬとよみて結し

しりくもみしそあつひのかりもも月風まつふこよふこよふ

せしつらつそえ強りてふ日したのわてそゆし

宿物くちつむしひしをたれり杉人かもあま

すのふらせみもこのつひまをゆりし

あつさけすおつさりしあはれはりてゆくもゆりぬ

人のこころまをく結し

ふ年とふまると竹とたゆめつてあつた

くちまもこころりりり月就とつて山のつらくもさう

まじの由子の入たして結し中勢のよみて結し

月就といきしははらうそをひひりん

世と捨てし人入りしやむりの月乃らり

世にゆりし子の結し

江のちちちとにまらりてゆりし

世にゆりしひかりとさやまさんゆりし

九月十日の初とに大将のつられはゆりし

こぬ人はゆりしとてあつた

くちまもこころりりり月就とつて山のつらくもさう

まじの由子の入たして結し中勢のよみて結し

月就といきしははらうそをひひりん

世と捨てし人入りしやむりの月乃らり

世にゆりし子の結し

江のちちちとにまらりてゆりし

世にゆりしひかりとさやまさんゆりし

九月十日の初とに大将のつられはゆりし

こぬ人はゆりしとてあつた

くちまもこころりりり月就とつて山のつらくもさう

まじの由子の入たして結し中勢のよみて結し

月就といきしははらうそをひひりん

世と捨てし人入りしやむりの月乃らり

世にゆりし子の結し

江のちちちとにまらりてゆりし

世にゆりしひかりとさやまさんゆりし

九月十日の初とに大将のつられはゆりし

こぬ人はゆりしとてあつた

くちまもこころりりり月就とつて山のつらくもさう

まじの由子の入たして結し中勢のよみて結し

月就といきしははらうそをひひりん

世と捨てし人入りしやむりの月乃らり

世にゆりし子の結し

江のちちちとにまらりてゆりし

世にゆりしひかりとさやまさんゆりし

八月十六日

月々けの病ハよあめよと
常々ねね々々ぬの山乃集も七二八八の月と云ふ流うるま

九月九日

秋宿のさくらのちの病をよしてはいつ世つかりと別しなり
小原乃右衛門の山乃集の病をよしてはいつ世つかりと別しなり
あまのつれなき秋の病をよしてはいつ世つかりと別しなり
もあつとゆくとゆくと人ちとつらけかひとさうめいり
ふあつとゆくとゆくと人ちとつらけかひとさうめいり

ねさくらの病

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさく

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさく

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

ねさくらの病をよしてはいつ世つかりと別しなり

八月をりよあつちのふねは海よりて月いとあつちをまきりて水の中

小まよいてるけえと作よれあつちのふね

つらつ月のえは海より林のわらわらなりよせむ

海よりやふかあつちの山に月とみゆとの林のゆつれ

四月中又つきて結し衆人よ

霧の命をいし海より林のわらわらなりよせむ

はらとたまりて作し衆人よ

いささかおれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

七月七日のうらなふあつちの月

いささかおれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

おれうちをみまはるくつと波の舟とみひきりれ

よみく侍し 花事よ
まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
三月七日のうりよ人のむしよ

いしーく切の切なき けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく
ゆるしとあはし ちいさな梅の本に 花を侍しよ

七月七日のうりよ 朝に花を侍しよ かなうくよのこゝろひきりく
りよよりそ 萩のて 萩を侍しよ かなうくよのこゝろひきりく

二月のうりよ けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく
さくらぬも かなうくあり かなうくよのこゝろひきりく

秋のうりよ けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく
おのふか月の松のうりよ かなうくよのこゝろひきりく

河原院のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
橋のうりよ かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

津の國のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
いしーく切の切なき けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく

おのふか月の松のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
橋のうりよ かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

山里のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
紅糸のうりよ かなうくよのこゝろひきりく

十二月のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
いしーく切の切なき けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく

日本とて かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

月のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく

風を侍しよ かなうくよのこゝろひきりく
いしーく切の切なき けりまはさくあり かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

四月のうりよ かなうくよのこゝろひきりく
まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

まじしになく 鶯北音とあはして かなうくよのこゝろひきりく
かなうくよのこゝろひきりく

第のね少のさそいしんんぬと吹く人お指の風

男の人此國も海にわたりしよこせうしりる女の
たうちかのくろくしよこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あはれんかともまをてたすこせ松とこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

いしといひて世とひこすうにうむ子ハ物さひまぬわしや成るん

あふ事とあつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

人のあがりて
この國乃 難波の言此うぬあし一やう様ありあけし

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

あつしよまは白きまのほりるさのよまきこせうしりる女のくろくしよこせうしりる女の

人なれをばりふんあつてきつるれり筆のあつておきなりとて

まのあつてきつるれり筆のあつておきなりとて
まのあつてきつるれり筆のあつておきなりとて
まのあつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて
あつてきつるれり筆のあつておきなりとて

④云のちりててをりけふ
 糸鞆の御宇は法皇
 元輔純存のちり任ら
 せて下向をいし時深海
 仲離別と惜まをよ
 こしは元輔区をせし
 しく松造集まをり
 元輔純存在るの内よ
 後考八幡文をより
 日の阿そふとをり事
 化なまてしを信をち
 家集まをりより
 元輔八幡壺を後撰
 集とえりびりみ人
 の公よりして法が細
 言が又や
 ⑤いをりし人
 ひがさく因をより
 り持女をり
 ⑥くまのだんま
 とい
 以ふものす

くらむとくがくきとくころよかくいん
 け

病の力つれきてえつまごころあり
 花の福ながくぬきおれより
 くらきだんまけくもくしん人けくま
 かののしにぬきとハたさでなぐて
 めくきとく教よまきいなうぞあやしくお
 がろくくまかけくろ女よかくいん
 ひとつづひりくをりせバれくろ
 くらくきくふまのしとくろも
 あら人がらひくく命をくがれさなれ
 子を河まこくみまきとく二三年をりよか

④春
 大和本紀云大隅ト三角ニ
 嶋崎アル故ニ跡ス角ト
 隅ト同シ和名類聚云
 云和銅六年割日向國
 四郡置大隅國檢校
 云和銅元年割日向
 四郡置次
 ⑤くろの
 大和本紀云薩摩ト往
 古倭人神通リトキ
 彼國ヲ颯トケサキテ
 過ケルユハ颯間ト号セ
 シヲ後ニ薩摩ト改ム
 ⑥松本郡
 統分ふはあり統分
 去紀トハ逸都縣と記
 日本紀云仲哀天皇
 統紫伊都縣至伊十迹
 手來天皇御船天皇美
 伊十迹曰伊蘇志時人
 號伊十迹手之本國曰
 伊蘇國今曰伊蘇也
 ⑦府友

くらくきくふまのしとくろも
 あら人がらひくく命をくがれさなれ
 子を河まこくみまきとく二三年をりよか
 くらくきくふまのしとくろも
 あら人がらひくく命をくがれさなれ
 子を河まこくみまきとく二三年をりよか
 くらくきくふまのしとくろも
 あら人がらひくく命をくがれさなれ
 子を河まこくみまきとく二三年をりよか

大宰太式小式などので
しき老う又ハ叔代府中
も位甘る老るどとを
びてあまひハ監成典
あどま位ハ在府内切
の事とほりさとり又
兼官の知れおとめ
あり老と府友とよと
職原句辭大全卷一
へり

① 惟去病
惟去病より娘病とも
ふ人九の字よりハハ
のたよりかけてとよ
つまバ君がとよぬふ
いの得る也

② 文選傳言羽獵岑參
詩ニ憑君傳語報平安

④ 北條也
北條人よちめからせ
あまえへる元捕り

⑤ 肥後必能回都岩敷の

うらふらけ 惟去集よ
秀とのせしとを
法象元捕ひごのちを
作りしとよあくらよれ
はまがたきとよをえ
はゆらまよりけり
やうちりやうのよ
作りけりしとよ
惟去集とよをえ
とよあくらよれ
て入る老又ハ信安
のあまよりとよをえ
とよあくらよれ
説ハ松尾山よりとよ
くみ松尾山よりとよ
岩敷山の教者よま
しとよあくらよれ
かまひとよ

⑥ 大宰府とよ
りが

みづの海乃不なるづのがつてとよ
きえぬべき命られども
おくらんひぬりしとよ
てとよ
お月をりり消息たせ
りぬるこちとよ
ちしとよ
せねば付まなくて
どなぬあらうよ
では
人のつむひ月なみをたて

おとよ
むり
んが
をた
や
と
い
い
と
を
ら
の
よ
み
や
け

くまの字依子依く
あつた宰友とまて
拾芥抄云太宰府室屯
二年十二月停執前國隸
太宰府延暦十六年九月
日廢執前又太宰府同
三年五月日置文
③紀元の本

肥後風土記云肥後國者
本肥前國合為二國昔
崇神天皇之世益城郡朝
來名峰有土蜘蛛名曰
打後頭獲二人案徒衆
百八十餘人獲於峰頭
常逆皇命不肯降服
天皇勅肥君等祖健
緒組遣誅彼徒衆健
緒組奉勅到來皆悉
誅夷使巡國東兼察
消息乃列八代郡白髮
山日晚止宿其夜虛空
有火自然而燎猶々
降下著燒此山健緒

組見之大懷驚怪行軍
既畢祭止朝廷速行
狀奏言云云天皇下
詔曰剪拂賊徒無因
眷海上之勲誰人比
之又火從空下燒山
亦怪火下之國可名
火國

日本紀曰景行天皇
五月壬辰朔從芦北發
船到火國於是日沒也
夜冥不知者野遙視火
光天皇詔狹抄者曰直
指火處因指火往之即
得著岸天皇問其火光
處曰何謂也國人對
曰是八代縣豊村亦尋
其火是誰人火也然不
得生茲知非人火故名

其國曰火國
釋日本紀載石全文士
人奏言此是火國八代
郡火邑云今よひくま
で毎年七月廿日小月八

⑦ ぼろがたれとんとく

とよまきくほむのさたきちんが
あぐふ川の中少ぎありやま

⑦ 字依の本しがわくて太宰府のさ度

③ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

④ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑤ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑥ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑦ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑧ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑨ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑩ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑪ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑫ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑬ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑭ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑮ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑯ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑰ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑱ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑲ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

⑳ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

㉑ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

㉒ 紀元の本しがわくて太宰府のさ度

十九日六代の海上小舟
ありて日本紀の八月
月と云ふことも今少
異なりた今後使の書

肥後肥前郡も在野史
元皇御宇小行基皇親の
泊瀬山去各ちといふ事
本ひがきかひせるとい
石塔ありて塔にちりり
後ちりり

⑩肥後王子山

肥後王子山御宇にあり
は石原の系を元皇の事
記ありて天を腹志
村と名に大御宇といふ
帝の皇子人といふ事
後ふま社ありて山とい
王子山と云肥後風記曰
玉名郡長湊濱西郡昔者
大足彦天皇詠球磨磨
遊還駕之時泊御船於
濱云云又御船左右游魚

多之持人吉備國朝勝見
以釣々之多有所獲即
獻天皇勅曰所獻魚此
為何魚朝勝見奏申
未解其名止似鱈魚
耳登御覽曰俗見多
物即云奈倍佐奈今
所獻魚甚此多有可
謂奈倍魚今謂奈倍
魚其緣也云云云り
のち世々も献るる所の
後赤の御贄とて有り
一書に長次の名字を
何やまるとも後と云へ
る云の長次と記し
後赤と云の記の云と
いふと記せり誤なり
長次の後赤漢字に云
るが、後赤魚とすふ
あかから鱈のこまはらぐ
る云云

⑪香椎之の
鏡か玉槽な郡者持村
よ何り神切買居る

いふはつとむいさせむとてつとせ
也後これに海をわたりて多
うひつづまうてむとれとるひいさた
やんがむひつづり
ちりやあかかたわの感れあも秋の
いさよの沖の津後なるむ
ある人のかこもていひれさ
りふまてい力ともかくとん
いさ令乃せくもさる
大もみろ海乃なるわつかり
去の物とらちせむんれ秋こ
かりのし今ちりしてあちり

又
駕かひり家いつちとちり
かりせ今ちちりなるや
きりのみり
たりあきりきられなると
とさや、秋のせさよい
むこのこと
きさから射きけふの的の
むこのの山れあむ
ある人のむも、はらり
妻れりともさるめいん
ちかかしていさるれこ

筑前風土記云到筑前國
例先參詣于智籠宮

②まほりまほり
まほりまほり

香椎之祭の時を穿
府に在る大武小武
祭文と伝はむなり
職原抄云小武相當從
五位下唐名都督少卿

④ちまやちまや
のあやちまや
は新新を今よのせて下
のうかり異かよよ
人まよちまやちまやか
ねのまよちまや

⑤ちまやちまや
ちまやちまや
ちまやちまや

香椎之の神本ハ松之
非切胃后三韓よりかへ
らせりハ異國なるのえ
かひく三の兵器と地産
こそちまやハ松の枝と
さやひのちまやちまや
本ちまやちまや

ついでまよちまよの
松ハ異まよちまよのん
とれまよちまよのん
松と名づくるなり

⑥柳枝なるまよん
まよ柳枝本とまよ
まよ柳枝本とまよ
柳のまよちまよとい
松のまよちまよの介
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

和名類聚抄ハ大隅ハ
美州郡を那の月ハ美
州ハありハちまよ
まよ

⑦まよのまよ
大隅ハ美州の事ハ
まよ

⑧まよの山

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

かかあねあつとつれぬまよりの
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ
まよちまよちまよ

多岐のすす地は益城郡
一矢山といふ山はつは蘇
大胎神の夫をこめてる
石よりはおもひをもち
おや又同團合名弟は
孫護山と云あり是
なりん

⑧あるのむしよ
は後大和物後よはよ
い名としひるる宰執
のちつち大和の檢の
もといはくしよりのが
りてとあり十八か書
よ同

⑨筑紫より
日本紀纂疏曰筑紫
洲者地之形似木鬼
俗謂耳附之鳥舊事
紀曰筑紫嶋身一面四
有各筑紫國謂曰日
別豊國謂豊日別肥
國謂速日別日向國
謂豊久士比泥別後
世彼分為九國は介

筑紫の筑紫をいふ

⑩又よきふ男

竹瓦物後せうひれを
のこあそるをいふ
きと、いそがなひめ
とえてしうかえは
うかしたとまきかを
まじふまじりのの
かきも家の戸もも
ちる人どいともやく
見るあしきとのとよ
るやむさきいもねま
このねもしうかこ
よりのをこくまなま
どもあへりまるとま
よりあんとよとまける
百葉集のすまひとの
くふよつひまのま
あかぐとといまごと
うねはこまをあけは
⑪山崎よもちとまよ
ゆきとまよのせをい
すらねよ

よきふのひさしはかくゆりごととがわ
とまひより山崎よもちとまよのてお孫
よのせなごまはねとまよとこもより
よちほりごととがわとひてお孫よのおね
これおかまもあふまのとな
ゆりあつてまよとまよぬ浪のよ
まひかきても人を失れあふ
こまよとまよとまよとまよとまよとまよ
こまよとまよとまよとまよとまよとまよ
おまよとまよとまよとまよとまよとまよ
あまよとまよとまよとまよとまよとまよ
たよとまよとまよとまよとまよとまよ

おまよとまよとまよとまよとまよとまよ
これとまよとまよとまよとまよとまよとまよ
かまよとまよとまよとまよとまよとまよ
まよとまよとまよとまよとまよとまよ
人よまよとまよとまよとまよとまよとまよ
ちまよとまよとまよとまよとまよとまよ
まよとまよとまよとまよとまよとまよ

⑫まよとまよ

秋かせのまよとまよとまよとまよとまよとまよ
吹くまよとまよとまよとまよとまよとまよ

⑬まよとまよのまよとまよとまよとまよとまよとまよ

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよ
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよ
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよ
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよ

大和物後抄よりむりし山
傍よりみ録のついで
淀川よきなりし

④ ちくぜんといふ

礫ト書細石也俗云小

石ノ類云硬石書

⑤ ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

権左衛門尉と筑前守

佐々木頼朝の御孫なり

りてゆきまを在るや

⑥ 監りし人

職原鈔云監太宰判

官也府内一切事掌

之又文案事令奉行也

⑦ 御堂の山

筑前守御堂山を電

山古名は山云日

本紀云神功皇后幸

筑紫自種日宮遷于

松峽宮時飄風忽起

御笠隨風故時人號

其所曰御笠

⑧ この山

筑前守御堂山を電

の南にあり村の名也

⑨ ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

ちくぜんといふ

原大金日本書紀
の人を事と命仰と
りて

④白河のそこの水
ひて

白河ハ化命河名山
より流る也

所智河と云豊後
風土記曰阿蘇河出

肥後國阿蘇小國之
峰河を河南山より

こゝ出る南を白河と
りひ小川と云河と

右河と云河と云も
トモリす深のれ

もとのうゑのりな
みどハ筑紫風土記云

肥後國開宗縣坤二十
餘里有二志山頂有

灵石石壁為垣清潭
百尋鋪百緑着緑為

質彩浪五色組黄金
以分間天下美奇出

茲華笑時々水滿從
南溢流于白川大和

物語物ハ白川ハ此の河
をふより出る河あり

是白して粉の下
と云河名念志蓋城記

广飽田等の法部を理
て海に入大河有り

ハ河名ハの中より出
白河のありさんとい

てある云元浦各集
ハ白河のたゆと云

ひひすひあぢのりち
せよまをんひりち

うしもひか白河の
と云わく畧文

④玉のかき
姓名志れど後撰主人

太式典範とあり太和
物語主人也太式と云

とも他名ちなるべし
⑤むすこくわらのかき

よめえはけてかくつやえとくむればも
何ぞとくひたまへバ名ありさひぶこる
つと人のいバあよよひいぢもよらづし
くれとかくれと云てあてておけを
まよよむて所なればいつてかくるり
ど河と云と云どあせ
②むすこくわらのかみの白河の
うたえとくむすこくわら
他名ちの館とくみちとよきせしよ
床の祢とくむらりのくれなぬぞ
かり出ふるよ山のむしん
まよよむとくわらとくよきかくる
つとまよとくむらりとくむしとくかくる
つとむらみの中とくむらりとくわら
うたえとくむらりとくむしとくわ
秋のふきやとくよらとくむら
ちの子とくむらとくむしとくわら
ひらとくむらとくむしとくわら
ごらのまよとくむらとくむしとくわ
てとくむらとくむしとくわら
はれとくむらとくむしとくわら
まよとくむらとくむしとくわら
つとむらとくむしとくわら
くむらとくむしとくわら

三つとむまをすりよ
 けりな大和物後よ八
 うをく庭のつらまを
 八何川乃三つとむま
 まをくあつとむまを
 ④ひごあちのつらまを
 元捕大和物後よ八武
 とあり
 ⑤すまとものおちまを
 ⑥せりりのまをけ
 九ちよありあつる
 山なり

三つとむまをすりよ
 けりな大和物後よ八
 うをく庭のつらまを
 八何川乃三つとむま
 まをくあつとむまを
 ④ひごあちのつらまを
 元捕大和物後よ八武
 とあり
 ⑤すまとものおちまを
 ⑥せりりのまをけ
 九ちよありあつる
 山なり

奥書云

元久二年六月二十九日校合了

從三位治部卿平判官

天文三年壬寅日三本を校合畢

天正二年六月十日於澁川冬考校合了

改正

拾遺家集終

柳枝軒校了

拾遺家集 附録

右家集よのま松垣が白河の三輪但のつらま撰集よ
 太式真範よをてよあつるつらま三代實録云仁和三年
 八月廿二日掃部頭從五位下藤原朝臣興範為筑前守
 大系圖云

宇合 式部卿 藏下麻呂 少納言 繩主 正三位 中納言 貞本 藏人正五位下

正世 肥後因幡守 從五位下 興範 彈正大弼正四位下 參議太宰大貳

禁秘抄云帥大貳趣任上古必參内中延喜興範友于云
 大和物後よ八太式純友誅よの史よくつらま三つとむま
 がよあつるとあり也太式ハ小也好古つらま純友討よま下
 り一書あつる淡ね門軍記よんつらま大系圖云

敏達天皇一春日皇子一妹子王大德毛人小錦冠毛野中納言
中納言位中納言

永見從五位陸奥大 峯守參議 葦參議 苜繪從四位下 好古大宰大貳
從五位陸奥大 從二位 從四位下 大宰大貳 位康保五來

不按ゆ一友尔真範一これ延花の一海以人けりしとて
は尔元捕がひとてい六七十年よりなり元捕が
元暦元年相壺として後撰集とてうづびしとて松垣が事
といひしえをくする事よあしめのもせしものなりん
とわ物流し北太武と書しとて謬傳の吳説とてそのを

とてなりぬ
あつたは松垣がよる白河のうと流すの白河とて
流すやも白河といふ河あとも松垣がよる白河
よるのよる友尔長長の十割抄に肥後國の遊女松垣と

あつた友尔長捕の伝雙子やも松垣の地名のよる松垣長
流すのよるのよる白河の件のをよるよるしとてなり
物從首書やも右のうとのをて白河の肥後河蘇山より流
し紀と右に載しとて白河のよる九品山蓮華寺より松垣が
石垣ありしとて地名の白河とてなりとてなりとてなり

松垣集と考へるなり
あつた松垣のよるのよる松垣の地名のよる白河の
よるのよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの
よるのよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの
松垣のよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの
よるのよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの
よるのよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの
よるのよるのよるのよるのよるのよるのよるのよるの

わの依、植根、白栂子、七、常盤（常盤のこゝろ）の...
りりし、白栂子、名、物、院、の、清、々、（此のこゝろ）、
りりし、海、軍、盛、衰、記、見、（此のこゝろ）、
りりし、こゝろ、を、りりし、
りりし、こゝろ、を、りりし、

寛永四年九月日
美濃三年十月廿日

幡籠子書
寺本集 板本也
中村直臣

右のりり、のりり、を、りり、
遠、海、を、誤、ち、か、
刑、補、の、りり、と、りり、

夫、後、次、は、和、國、の、風、俗、
りりし、も、りりし、
りりし、りりし、
りりし、りりし、
りりし、りりし、

ゆゑ、
赤札

赤札のりりし、
ゆゑ、
美、濃、の、りりし、

うらまのつらみおしりて河そのらありら〜なるよめ

教来流流

山よひの〜て思流をすうらの流の者ぞ〜

介牧浮橋

あやふさと〜つてお牧のふら〜割れ竹乃うさ〜

足ぬ人ふつ〜あやふさと〜き竹の浮橋

衣笠

ささげは〜小志のぐ衣笠二を此砕る〜

坂梨文

世の中れ人の心のさう〜ちりさうか〜の神

波野原

音の海〜はのたるれや〜秋もさ〜

馬門を名あ〜も思るせ〜白波

後野

秋ま〜さふあのおの〜あふ月や後の〜

小宮

小宮の〜してわの〜とい〜

楠木也

あがり〜松の梢や〜あ〜

錦野

ねく〜松の末ね〜

け〜と〜切げ〜

松門橋

松風の〜はゆあ〜

河原文

杖立 小国

く〜病を〜杖立〜

杖持山

あ〜の志〜杖持山〜

鏡の井

至月の〜てまの〜水北〜

久々

あ〜を〜や〜

白糸流 小国

ま〜て〜手〜

傍打流 小国

あ〜ひ〜

深草山

清の〜

錫城 小国

ま〜

杖田の里にゆり〜

山鹿丸に記

夜不三三系の指吹くして風もあつたの教れ海へこ

山鹿丸

その名も縁なく岩の岩を流るるよきと云ふは

山鹿丸

むねもこころいりてこころまじくもさういふと人いふん

西行巻

あふのたのむくゆりてちのめくくかくもくく月乳

山鹿丸

即きさるるもさういふゆりのゆりて今と山鹿丸の神れまたく

山鹿丸

昔のよき名も船のねくよいりてもさういふ

山鹿丸

ゆりてぬ井のゆりて月のみと物とたれ

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

春のうらみも水くり秋も又春のふゆじ里れゆりけこ

山鹿丸

木とあつてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

日向山吾平山

山鹿丸に記

君代成方代とくくくの日向のふとあつて日の中

子早振神のゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

美山のゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

子とあつてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山鹿丸

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

高嶺 今更に干しん夕けるま田のふの塔のねを

白川 舟をほきかたの末をく今或大なり白川の浪

白菊洲 能田浦 能田浦 名とよしつて白くくの名とのかしをあらけり

白糸渡 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山 秋ハス 金峯山

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

大波川 大波川 大波川 大波川

三南山

秋風よ乃うびく雲の三津いで月とるすしに山がしづけさ

牧山

ありしそよよる月とけのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

丁廻山

長狭のむくむく人狗のあそんでちとせし秋ふししの長狭
夕暮さきし長狭のうきくむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

兼水

法老道三つのおまゝあそんでおもしろいおまゝのあ

兼城跡

七城跡

湖上湖の白波流すうてなまなうて流る湖ハ七湖

七城跡

秋の月よりそく天つて乙女やまゝあつらん

扶那河

雁形川

昔これ作りし白波のやうくの川よ三折らん

緑川

年月とつりぬやれど同じ念のうきふもせだ緑川あ

沙弥山

三折川のくくく月のおまゝあけよえやうしのるまよ

田毎月

月このころぬ月の影さよく田毎はゆる月ハ月

入依山

あつそり矢アのり人おひれく山と入の山とそらん

入依橋

り人の来たふ矢ア北なるれはらとつらこのこくこらん

月見嶽

くのりこもなまきくけやおぬの月とるまの秋のよらん

日當橋

笑とまり散とつりまてはこれ橋くま可〜この花の下げ

お津橋

昔これ流る橋のおまゝこの谷のしゆり

白庭溪下

寺汐の屋もるぬ秋の秋よけも希しく白庭の流

お津橋

打もてをるに流る湖はあそり世のよまごめん

お津橋

板をさきこく世の秋やそへ来て秋のあハ代松が

お津橋

のあのおかほけりハ白波のあそく〜とせと海り人

お津橋

りのゆのゆれはくらびんとと〜は雲れ京乃松風

お津橋

ハ代松が

お津橋

谷ねま

谷川の底も七秋やかやあらんちりてし孰のそりむねあ

物見社

秋代に秋枝の村まきりあひて妙をそるありら乃夜ち

白鞍山

秋代にさしりし年月と後りこし白鞍山の君乃はけの

流池

まよりてるありし物と孰んして流の池乃各社可し

流池の池乃

同じ名を流しし物と孰んして流の池乃各社可し

府嶽

ふぬちのあしきとてさしりし八月の孰の池乃

白岳

こゝのそりし物と孰んして流の池乃各社可し

水

山乃と云ふとてさしりし水に流るるなりし

二室嶽

非の中ニ室乃岳や妙よるなりし

久

波のよすの浦のうけすの年とてなを流るるなりし

不知火 秋廻流

在りし今もあきとて白蓮の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

秋廻流の影を流るるなりし

秋廻流

吉原塚

吉原の昔をとりてお月夜を照れて吉原井よ吉原の月

岡見山

岡の海流をとりてある岡見山ありあけハ青く老れお月夜

極川

月一急の幸ありて極川流をとりてお月夜を照れて

野坂

お月夜をとりて野坂を照れてお月夜を照れて

月形淵

お月夜をとりて月形淵を照れてお月夜を照れて

藤原松

お月夜をとりて藤原松を照れてお月夜を照れて

豊後伝説

お月夜をとりて豊後伝説を照れてお月夜を照れて

海過

お月夜をとりて海過を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

脱漏

吉原

吉原の昔をとりてお月夜を照れて吉原井よ吉原の月

極川

極川の海流をとりてある極川ありあけハ青く老れお月夜

野坂

お月夜をとりて野坂を照れてお月夜を照れて

月形淵

お月夜をとりて月形淵を照れてお月夜を照れて

藤原松

お月夜をとりて藤原松を照れてお月夜を照れて

豊後伝説

お月夜をとりて豊後伝説を照れてお月夜を照れて

海過

お月夜をとりて海過を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

お月夜の浦

お月夜をとりてお月夜の浦を照れてお月夜を照れて

云々なりかく勢を... 甲寅年久勃発的の形も... 津の界隈... 又御宿村流川村水落村と云ふ... 此の川に... 又御宿村流川村水落村と云ふ... 此の川に...

此の川に... 又御宿村流川村水落村と云ふ... 此の川に... 又御宿村流川村水落村と云ふ... 此の川に...

此雜哥也森本松溪子一瑞之編集也
天明三癸卯年夏五月念三日以森本
氏自筆本寫之雖然間々文字不分
明者有之而不全文尚以面可尋之計
卷成下縣中東松山林 至寺本直康

かく可記しぬしもえくくうめんし

此のまのん 係ししものし

寺本公之 家藏於借常山 之早し ぬし 不安
文政三年正月十日 中村萬喜直道 宛

遊高雜比考之四

